主権者は私たち！　を実践する

市民連合共同代表　菱山　南帆子

「主権者は」「私たち！」

これは国会をはじめとしたペンライト集会における掛け合いコールだ。コーラーが「主権者は」とマイクで呼びかけると慣れた様子で参加者は「私たち」と叫び返す。この間のペンライトを用いた全国的な運動の高揚の特徴は、一部の政治家たちが決めるのではく、一部の政治家たちに任せるでもなく、主権者は私たちだと主張する訴えが多いことだ。日本特有の代行主義から脱却し、自立した一個人として、主権者運動がかつてない盛り上がりと広がり方を見せている。

私は２０２５年の２月８日、韓国ソウルでの20万人デモに韓国側から呼ばれ、集会壇上で連帯のスピーチをした。その時、目の前に広がるペンライトと旗の波に感動した。集会とデモ終了後、民衆運動の仲間に「この光のムーブメントを必ず日本に持ち帰る」と約束したのが事の始まりだった。

なぜこれほどまでに「ペンライト」が流行ることになったのだろうか。ペンライトを呼びかけた第一人者として背景を説明したいと思う。なぜならば、韓国民主運動における歴史的な経過なくしてペンライトの広がりを語ることはできないからだ。

韓国「光の革命」　ろうそくからペンライトへ

２０２４年の12月に韓国の当時の大統領、尹（ユン）大統領が戒厳令を突如として発令したことをきっかけに、怒った民衆が軍に立ち向かい巨大な抗議デモが毎週土曜に行われることになったなかで広まり、後に「光の革命」と呼ばれる象徴的なアイテムとなったのがペンライトだった。

韓国は１９８７年にそれまでの軍政を民主化運動によって、転換。すべての人たちに選挙権が与えられた。たった40年前の話だ。何度も戒厳令を出されては、民

衆は戒厳軍と闘ってきた。そのためには市民も時には「市民軍」を結成したり、武器や火炎瓶を手に軍を相手に自由と民主主義のために立ち向かわざるを得なかった歴史がある。韓国は今回の尹大統領の戒厳令を含め実に約17回もの戒厳令をくぐりぬけてきた。

１９８７年に韓国民衆の長きにわたる闘いの末、民主化が実現された。それ以降、民衆運動では火炎瓶を持っていたその手に、本物のろうそくを紙コップの中で灯す「キャンドルデモ」が主流化していく。かつて火炎瓶を投げた手に今は、キャンドルを掲げるという転換には民主主義の定着と共に非暴力的行動の有効性に対する確信が背景にあった。

２０２５年２月８日
韓国ソウル２０万人デモ

このキャンドルデモは、李明博（イミョンバク）大統領を退陣させ更にその後、朴槿恵大統領の不正や汚職、セウォル号海難事故対応に対しても、より大規模となり、大統領の弾劾を実現し、「キャンドル革命」と名づけられた。

与党の政治家から「ろうそくの火は風が吹けば消える」と闘いを過少詳価する発言があり、これに怒った市民が「これなら消えない」とろうそく型をしたＬＥＤのペンライトを手にし始めたことから尹大統領退陣を勝ち取る光の革命まで民主運動は繋がっているのだ。

日本の市民運動も進化を続ける

私たちが、日本の市民運動でペンライトを使うのは韓国の闘い方の真似やパクリではない。侵略戦争への反省としての日本国憲法はアジアの市民みんなで実践していかなければならない。ペンライトの光は韓国での民衆運動の歴史的アイテムを引き継いでいく連帯の証だ。

今こそ市民の平和外交によって反戦平和を訴える光の包囲網を広げていくときではないだろうか。

韓国の運動を引き継いでいるのはペンライトだけではない。ユニークな架空団体のぼり旗もこの間の運動の特徴だ。この架空団体旗は尹大統領退陣デモにおいて、「金をもらってきている」「共産主義者の集まり」と言った、日本でもよく言われる誹謗中傷やレッテル貼りに対抗するユニークな闘い方として、一人ひとりが自分の意思でデモに参加しているという意思表示のために、架空の団体をでっち上げのぼり旗を作ってデモに参加する

「現代の傘連判状」といわれている集会後に自分たちのデモグッズを集めて写真を撮る人気タイムの写真

人々が増え始めた。例えば「次女の会」「親知らずを抜くのに苦労した人の会」などだ。日本でも「スマホ画面バキバキの会」「道端のねこに声をかける労働者の会」「ダイエットは明日からの会」など、面白い架空団体のぼり旗が続々と登場している。そのような旗のなかで実在の労働組合の旗があるとＳＮＳでは一気に盛り上がる。「〇〇労働組合さん頑張って」といった形で市民運動と労働運動は新たな連帯感が生まれている。

ペンライト、架空団体のぼり旗、創意工夫凝らしたプラカード。主催者が用意したものではなく、オリジナリティあふれる創作物を持ってデモに参加できる「自由度の高さ」がデモへの参加のハードルを下げ、広がりの加速を強めたのではないかと考える。

そして日本の市民運動は進化を続ける。国会前や主要ターミナル駅に多くの人が集まるだけではなく、地方や商店街、様々なところで少人数でもいいから人々が何らかの意思を示すアクションが始まった。そこには各地のデモを可視化し、一覧にしてまとめるサイト、「デモカレンダー」の登場が大きく影響している。デモカレンダーのおかげで、全国各地市民の立ち上がりは多様化し細かく広がって行き、一極集中デモから同時多発型のデモへと変化を遂げている。「どれだけ人を集めるか」ではなく「どう見せるか」といった動員よりもデモ映えを気にするようになり、参加者から主体者へと意識が変わっていく姿は民主主義の根付きと今後の未来への希望に大きな光をさすものだと確信している。

これを一時的な盛り上がりにしないよう、長年市民運動に携わる人間は今までの運動の積み重ねに自信を持ち、意識と感覚をアップデートさせながら、無関心層、政治や未来に絶望している人々とどう取り組んでいくか、次のステージに進むために知恵を絞ろう。

（ひしやま　なほこ）